



企画展「くらしのうつりかわりと道具」展示品紹介①

同じ硬貨なのに、こんなに違う！

倉内地区にお住いの方より寄贈された明治～昭和の貨幣を展示しています。一つ一つを並べてみると、同じ硬貨でも製造年が違えば材質やデザインが違います。例えば、10銭硬貨に注目してみると、戦争による金属不足で材質や大きさが変わってきたことがよく分かります。



昔の貨幣コーナーの様子

1 10銭白銅貨 大正9年～15年発行



当時、大戦の影響で銀の地金価格が急騰、大量の銀貨が海外に流出し極端な小銭不足となる。政府は臨時の対策として少額紙幣を発行。この硬貨は、その少額紙幣の回収目的で多量に発行された。

2 10銭ニッケル貨 昭和8年～12年発行



白銅貨から耐久に優れているニッケルに変更。融点が高いため当時の技術では偽造が難しく偽造防止にも役に立った。

3 10銭アルミ青銅貨 昭和13年～15年発行



昭和12年、日中戦争の戦時体制下となり、ニッケル貨は製造中止。代用としてアルミニウムと銅の合金が使用された。アルミ青銅はフランスの発行例に倣ったもので、戦時貨幣の材質として世界各国で流行した。

画像：As6673 - 投稿者自身による作品, CC表示-継承 3.0,
<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=5198856>による

4 菊 10銭アルミ貨 昭和15年～18年発行



戦争の長期化によるアルミ不足から2度の量目変更により3種類ある。昭和15年と16年は1.5g。昭和16年8月から18年は1.2g。昭和18年2月には1.0gとなる。

5 10銭錫貨 昭和19年発行



第二次世界大戦中に発行され、発行枚数が多く質も低い。錫は熱に弱くやわらかく、本来貨幣として使用すべきではないが、アルミニウムなども枯渇した当時ではこれを用いるほかなかった。

一つの硬貨から、その時代の様子を垣間見ることができます！

